

信州イスラーム世界勉強会 2023/9/9 の行事*を終えて

*対話集会「世界の中の日本の中東・イスラーム報道〈これまで〉と〈これから〉」

[同日午前の記録映画 Caravan to the Future 上映会に続いての]

板垣雄三 記 (2023/9/11)

1月28日夜 松本の‘Café れら’での会話からはじまった企画が、足掛け7ヵ月+旬日の準備期間にいろいろと枝葉を伸ばして実を結び、長く記憶されるであろう国際報道めぐる市民の対話集会&映画上映会としてめでたく開催されるに到った。まず真っ先に固まったのは4名の方々からなるパネルで、杉山文彦氏の尽力による。ついで、集会の司会進行を担うコーディネーターを若林啓史氏が引き受けてくださり、プログラム具体化に尽力いただいた。準備の途中から、前年刊行された著書『トゥアレグ：自由への帰路』により「齋藤茂太賞 2023」受賞者に選ばれたデコート豊崎アリサ氏のドキュメンタリ映画 Caravan to the Future の上映を並行的におこなう計画が浮上、同氏の協力・参加が得られることとなる。この件では、岩田渉氏が仲介の労をとってくださった。準備過程の全局面で、会場設営・広報・資料作成はじめ内外の実務のすべてを献身的に処理され、本行事を実現させた支柱としての功績は、勉強会事務局を引き受けてくださっている渡辺聡氏に帰する。

集会の内容は、塩交易の歴史や物づくりの伝統や直面するエネルギー危機を自覚する信州という地域(場)において、文化・文明の悠久の展開に関わる視野のもと、日々激動する国際政治経済の動態把握とも密接に関連させながら、学術研究の動向や学校教育の最前線や社会の世界認識の問題点を参照しつつ、メディアの現場と市民との間の率直な対話を深めようとする、多面的で意欲的な試みであった。

集会をつうじて筆者が注目したのは、以下のような事柄(順序不同)である。

2013年年初頭のアルジェリアはイナメナスのガスプラント襲撃事件[それへの対応が第2次政権〈安倍政治〉の起点を画した]を巡り、今年度「齋藤茂太賞」受賞作品中での著者デコート豊崎アリサ氏が明記した日本メディアの問題性の観察・体験の公的証言に対して、同事件の報道に深く関与する立場にあった石合力氏が当時の現地取材の置かれていた制約条件・状況を説明し、杉山文彦氏が日本のメディア一般の海外取材態勢の貧しい実態を数値的に示す、公的応答が、この集会でなされたこと / 現地取材について先行世代ジャーナリストが蓄積したノウハウが今、後続世代に継承されるのが難しくなっているという内藤正彦氏の午後の嘆きが、トゥアレグ若年層のサハラ越え塩交易キャラヴァン離れに対するデコート豊崎アリサ氏の午前の嘆きと、不思議な通底性において、参加者に印象づけられたこと / 「国」単位主体で見・考える目線に対して、「個」に眼を向ける視角を報道の使命として大事にしたい、という工藤信一氏の宣言は、参加者にとって意義深く受け止められたこと / 中東・イスラーム報道の〈これから〉において「グローバル・サウス」の報道力に関する杉山文彦氏の提言・考察の敷衍拡大版が提示されたこと / 午前の記録映画上映後

の対話トークでも、午後の提言でも、鶴飼哲氏の「いま・ここで」の主体的思考の提起において、わけてもニジェルのクーデタ・ウラン鉱山に関連して核・原発・放射線被曝に関する問題への関心の意義づけが明確化されたこと / 提言者の森井雅子氏・金城美幸氏の言及する〈これから〉の課題と石合力氏が発言資料で提示する課題とは、交差する点があまた認められること / 一般視聴者に対する出川展恒氏の解説手法と金城美幸氏が求める現実誤認に誘導する操作用語(概念)への批判とは、小川幸司氏が強調するファクト吟味に基づく「鳥の眼」・「蟻の眼」を活かした主体的な「認知・語り」構成力の問題と結び合うに違いない関係性が浮かび上がったこと / 「報道の自由」の根幹に関わる問題として注目すべき安田純平氏の訴訟の不合理な結末の切迫(森井雅子氏)や、イスラエル国家のナラティブに沿う「諸国民の中の正義の人」賞[命のビザの杉原千畝に続く根井三郎推薦]の話題でパレスチナ問題への眼を逸らさせる相変わらぬ間歇的操作に力貸す日本メディアの最近の動きへの憂慮(金城美幸氏)という、当面のアクチュアルな課題について警鐘が打たれたこと / 小川幸司氏の「歴史総合」に日本を包摂する現代世界総体のリンクをつかむ捉え方の新しさを敏感に受けとめた信州大学経法学部美甘信吾教授ゼミ(国際政治)のゼミ生有志の発言は、聴く者の心励ます発言だったこと / 日本社会の女性の国際的活躍拡大を志向してマレーシアついでイランを訪れた昭和女子大学総長 坂東真理子氏、中東や東南アジアの現地紙の日本語訳記事を紹介する TUFsmedia の 2005 年以來の活動経験を有し国際メディア情報センターの新設も成った東京外国語大学の学長でトルコ研究者でもある林佳世子氏、白い杖の留学生を支援してその面でイスラーム圏との結びつきを深める国際視覚障害者援護協会 IAVI 理事長にして安藤昌益の思想研究者 石渡博明氏、ベトナム戦取材で活躍し中東でも幾多の体験を積み海外の戦乱と深刻に連結する米・日軍事要塞と化した沖縄出身者として日本の若者たちの動向を注視する報道写真家 石川文洋氏、それぞれがこの対話集会の企てに対する期待を込めて提言メッセージを寄せられたこと / であった。これらの提言・メッセージ・発言・指摘・応答・共感の凝集こそ、本集会が挙げた成果である。

午前の映画・トークも新鮮で感銘深いものであったが、午後の集会でも、発言者各自が言うべきと信じることを言うと同時に、聴く者は語られることの積極面を探り当てようとし、自らの賛否の立場は自覚しつつも話者の言辞のまじめさや情熱には拍手を送るといった「対話」精神が横溢する雰囲気があった。特定新聞の取り沙汰が浮上しても、パネルはもちろん参加者全体が、あくまでメディア一般の問題として考え合い学び合おうとした。問題の指摘に際して不毛な非難・反駁の応酬など無く、爽快な「対話」フォーラムが出現していた。若林啓史氏の不介入を貫いた司会とユーモア溢れる眩きの箴言も大きな助けであったし、大野博人氏の Op-Ed に事寄せてのメディアのオープンネス・寛容さ志向や情報の送り手と受け手との協同交流の理想の話も、まことに良い示唆的「まとめ」であった。

報道のプロも大衆も共に市民感覚で取り組んだ「市民・メディアの対話実験」として、記録されてよい集まりだったと自負できよう。配布資料は、集会終了後も、繰り返し眺め考える材料として活用されることが望まれる。この種の集会が世の潮流となることも。了